

2.10 静電容量係数と相反定理

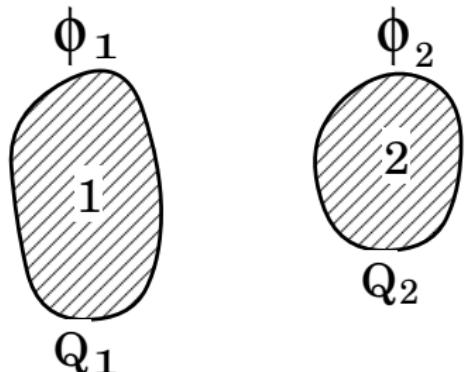
電磁気学詳論Ⅰ(2019)

田中担当クラス

<http://www-het.phys.sci.osaka-u.ac.jp/~tanaka/teaching.html>

第2章 静電場

2.10.1 静電容量係数



2つの導体から成る系を考える。導体1(2)のポテンシャルを $\phi_{1(2)}$ 、電荷を $Q_{1(2)}$ とする。

(i) $\phi_1 \neq 0, \phi_2 = 0$ とすると、ラプラス方程式(とその境界条件)

$$\Delta\phi(\mathbf{r}) = 0, \phi(\text{導体1の表面}) = \phi_1, \phi(\text{導体2の表面}) = 0, \quad (1)$$

の解 $\phi_1(\mathbf{r})$ は、 ϕ_1 に比例。 $(\phi_1$ を2倍にすれば、 $\phi_1(\mathbf{r})$ も2倍になる。) 電場、導体表面の電荷も比例。 $(\because \mathbf{E} = -\nabla\phi, E = \sigma/\epsilon_0.)$ 従って、 C_{11}, C_{21} を定数として、

$$Q_1 = C_{11}\phi_1, \quad Q_2 = C_{21}\phi_1. \quad (2)$$

(ii) $\phi_1 = 0, \phi_2 \neq 0$ とすると, 同様に

$$\Delta\phi(\mathbf{r}) = 0, \phi(\text{導体 1 の表面}) = 0, \phi(\text{導体 2 の表面}) = \phi_2, \quad (3)$$

の解 $\phi_2(\mathbf{r})$ は, ϕ_2 に比例. つまり,

$$Q_1 = C_{12}\phi_2, \quad Q_2 = C_{22}\phi_2. \quad (4)$$

(iii) $\phi_1 \neq 0, \phi_2 \neq 0$ のとき,

$$\Delta\phi(\mathbf{r}) = 0, \phi(\text{導体 1 の表面}) = \phi_1, \phi(\text{導体 2 の表面}) = \phi_2, \quad (5)$$

の解は $\phi(\mathbf{r}) = \phi_1(\mathbf{r}) + \phi_2(\mathbf{r})$. 従って,

$$Q_1 = C_{11}\phi_1 + C_{12}\phi_2, \quad Q_2 = C_{21}\phi_1 + C_{22}\phi_2. \quad (6)$$

行列で書くと,

$$\begin{pmatrix} Q_1 \\ Q_2 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} C_{11} & C_{12} \\ C_{21} & C_{22} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \phi_1 \\ \phi_2 \end{pmatrix}. \quad (7)$$

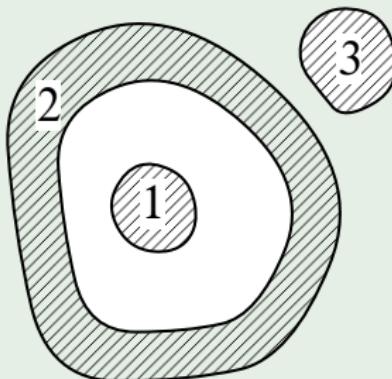
一般に n 個の導体があるとき、

静電容量係数 C_{ij}

$$\begin{pmatrix} Q_1 \\ \vdots \\ Q_n \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} C_{11} & \cdots & C_{1n} \\ \vdots & \ddots & \vdots \\ C_{n1} & \cdots & C_{nn} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \phi_1 \\ \vdots \\ \phi_n \end{pmatrix}. \quad (8)$$

注: C_{ij} は導体の形状、配置のみで決まる。

例: 静電遮蔽



図のような 3 つの導体を考える。導体 1 は導体 2 に完全に囲まれている。導体 1 は導体 2 によって静電遮蔽されていて、導体 3 の影響を受けない。

一般に,

$$Q_1 = C_{11}\phi_1 + C_{12}\phi_2 + C_{13}\phi_3, \quad (9)$$

が成り立つ. $Q_1 = 0$ とすると, 空洞部分も含めて導体 2 の内部に電場はなく, 等電位. つまり, $\phi_1 = \phi_2$. 式 (9) より,

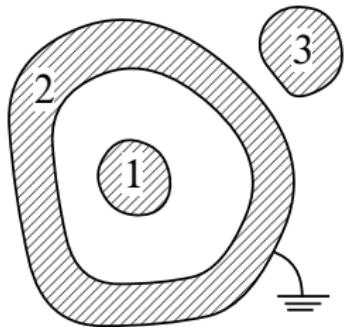
$$0 = (C_{11} + C_{12})\phi_2 + C_{13}\phi_3. \quad (10)$$

これは任意の ϕ_2, ϕ_3 について成立するので,

$C_{11} + C_{12} = 0, \quad C_{13} = 0$. 式 (9) に代入すると,

$$Q_1 = C_{11}(\phi_1 - \phi_2). \quad (11)$$

(導体 3 の影響を受けないことがわかる.) さらに,



図のように, 導体 2 を接地して $\phi_2 = 0$ とすると,

$$Q_1 = C_{11}\phi_1. \quad (12)$$

つまり, 導体 1 の電位 ϕ_1 は導体 1 の電荷 Q_1 のみで決まり, 導体 2,3 に影響されない.

2.10.2 相反定理

相反定理

$$C_{ij} = C_{ji} \quad (13)$$

証明のアイデア: 導体の電荷をわずかに変化させたときの静電エネルギーの変化を 2 つの方法で評価して、結果が一致するための条件を求める。

証明: 簡単のため、 $n = 2$ の場合を考える。2 つの導体の静電エネルギーは、式 (2. 9. 5) より

$$U_e = \frac{1}{2}(Q_1\phi_1 + Q_2\phi_2). \quad (14)$$

式 (7) より、

$$\begin{pmatrix} \phi_1 \\ \phi_2 \end{pmatrix} = \frac{1}{C_{11}C_{22} - C_{12}C_{21}} \begin{pmatrix} C_{22} & -C_{12} \\ -C_{21} & C_{11} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} Q_1 \\ Q_2 \end{pmatrix}. \quad (15)$$

式(14)に代入して、

$$U_e = \frac{1}{2(C_{11}C_{22} - C_{12}C_{21})} [C_{22}Q_1^2 - (C_{12} + C_{21})Q_1Q_2 + C_{11}Q_2^2]. \quad (16)$$

$Q_1 \rightarrow Q_1 + \delta Q_1$ としたときの U_e の変化は、 δQ_1 の 1 次までで、

$$\delta U_e = \frac{\partial U}{\partial Q_1} \delta Q_1 \quad (17)$$

$$= \boxed{\frac{1}{2(C_{11}C_{22} - C_{12}C_{21})} [2C_{22}Q_1 - (C_{12} + C_{21})Q_2]} \delta Q_1.$$

一方、 δU_e は無限遠 ($\phi = 0$) から導体 1 ($\phi = \phi_1$) まで、微小電荷 δQ_1 を運ぶのに必要な仕事に等しい。つまり、 $\delta U_e = \phi_1 \delta Q_1$ 。式(15)より、

$$\delta U_e = \frac{1}{C_{11}C_{22} - C_{12}C_{21}} (C_{22}Q_1 - C_{12}Q_2) \delta Q_1. \quad (18)$$

式(17)と式(18)を比較して、 $C_{12} = C_{21}$ 。 (証明終)

コンデンサーの静電容量

$Q_1 = -Q_2 =: Q$ として、式(15)より、

$$\phi_1 = \frac{C_{22} + C_{12}}{C_{11}C_{22} - C_{12}^2} Q, \quad \phi_2 = -\frac{C_{11} + C_{12}}{C_{11}C_{22} - C_{12}^2} Q. \quad (19)$$

よって、極板間の電位差は、

$$\phi_1 - \phi_2 = \frac{C_{11} + C_{22} + 2C_{12}}{C_{11}C_{22} - C_{12}^2} Q. \quad (20)$$

式(2.8.1)と比較して、

$$C = \frac{C_{11}C_{22} - C_{12}^2}{C_{11} + C_{22} + 2C_{12}}. \quad (21)$$